

「泥流地帯」 三浦綾子著 新潮文庫 1982年発行

三浦綾子の代表作といえば、「氷点」を挙げる人が多いかもしれないが、私は泥流地帯をお薦めしたい。

泥流地帯は、上富良野町を舞台に大正15年（1926年）に十勝岳の噴火により起こった泥流被害とそこからの復興を描いた実話をもとにした作品である。主人公の耕作は、三浦綾子の夫である三浦光世の幼少期の実体験をもとにしているため、当時の北海道で開拓に従事していた人達の過酷ながらも生き生きとした生活がリアルに描写されている。

江戸時代から噴火を繰り返していた十勝岳は、1926年の春に噴火し、山頂に積もっていた雪を溶かすことで大規模な泥流になる。そのスピードは火口から25km離れた上富良野町（草分分館防災センター付近）まで25分ほどで到達したと言われている。

この泥流被害により上富良野町の肥沃な大地は、硫黄を含んだ泥が木を押し流し、田畑を覆い、作物が育たない不毛の土地となった。生き残った人達は、泥に埋まった巨大な流木を拾い上げ、客土を入れることで硫黄を含んだ泥を覆うなど大変な苦勞をしたらしい。その結果、現在の上富良野町のようなメロン、じゃがいもや米などの農産物が豊富に収穫できる土地まで復興することができたのだ。

まだまだ「泥流地帯」について語りたいが、この本に興味を持った人は、ぜひ上富良野開拓記念館を訪れることをお薦めしたい。記念館は、当時村長だった吉田貞次郎の住宅を移築したものだ。館内には大正泥流についての解説や当時の貴重な写真が展示されているので、本の内容をより深く理解できるだろう。記念館の近くには泥流により流されてきた巨大な流木の実物や「泥流地帯」の文学碑もあり見応えがある。